

日本のポンペイ

～ 渋川市の遺跡を探る ～

No.9

『白井遺跡群の馬の群れ』

白井遺跡群は、国道17号と国道353号の鯉沢バイパス建設に先立って、平成2年から調査が行われました。子持地区では、黒井峯遺跡の大発見があった後であったため、新たな集落の発見が期待されました。

しかし、榛名山の2度目の噴火で降り積もった軽石層の下から出てきたのは、予想外のものでした。

6世紀中頃の当時の地面の上には、直径10センチ前後で、深さ0.5～1センチ程度の丸いくぼみが無数に残されていたのです。それは、なんと馬の足跡でした。足跡の残る範囲は、鯉沢バイパスの全線に渡るほど広範囲で、この辺りが広大な馬の放牧地であったことが分かりました。

現代の私たちは、馬と聞いてもさほど驚きませんが、古墳時代の人にとって馬は特別な存在でした。弥生時代までは日本に馬はおらず、家畜として馬を飼い、使いこなす技術は、古墳時代になって朝鮮半島から伝えられたものだったのです。そして本格的に馬の飼育が始まったのは、5世紀と考えられており、繁殖や調教は、特別な技術を持った集団でなければ難しいものでした。

白井遺跡群は、火山噴火で埋もれたために、普通の遺跡では残ることのない地表面のわずかな凹凸まで保存され、仔馬の足跡も見つかりました。

6世紀中頃にこの地で馬の群れを飼育していたのは、一体どのような人々だったのでしょうか。

（群馬県企画部世界遺産課 次長 井上昌美）



白線で印をしたものが馬の足跡